

第28回アジア・太平洋賞

アジア太平洋地域の政治・経済・文化などに関する優れた本を著した研究者、実践者に贈る第28回アジア・太平洋賞は選考の結果、特別賞4点が決まった。大賞の該当作はなかった。特別賞に選ばれた「福祉のアジア」は、上村泰裕氏が経済的に相互依存が深まるアジア各国の社会保障制度の実態を比較研究し、地域全体の福祉拡充に向けた各国の政策能力向上の可能性について提言した。「現代インドのカーストと不可触民」は、鈴木真弥氏がインドのカースト制について、精力的な現地調査をもとに「不可触民」と言われる人々の実態を明らかにし、今後の展望を示した。また堀田江理氏の「1941 決意なき開戦」は、真珠湾攻撃に至る日本国内の政治、軍部の動きを立体的に検証し、敗戦の可能性を強く認識しつつ開戦へと突き進んだ当時の指導部の無責任さを鋭く指摘した。

「中国経済学入門」は、中国経済の独自性を「曖昧な制度」というキーワードで切り、豊富な実例研究を基に中国型資本主義の特殊性の行方を論じた意欲作。加藤弘之氏は選考中の今年8月に死去した。4冊は昨年7月初めから1年間に日本語で出版された応募作品84点の中から選ばれた。表彰式は9日午後5時から東京都千代田区、パレスサイドビル9階レストラン「アラスカ」で行われた。なお、今回から受賞した著作の出版社に記念の盾が贈られた。

◇大賞

記念の盾と賞金200万円 副賞 ANA国際航空券

該当作なし

◇特別賞

記念の盾と賞金各30万円

★「福祉のアジア 国際比較から政策構想へ」(名古屋大学出版会)

上村泰裕(かみむら・やすひろ)氏 名古屋大学大学院環境学研究科准教授

★「現代インドのカーストと不可触民 都市下層民のエスノグラフィー」(慶応義塾大学出版会)

鈴木真弥(すずき・まや)氏 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員

★「1941 決意なき開戦 現代日本の起源」(人文書院)

堀田江理(ほった・えり)氏 元オックスフォード大学リサーチ・フェロー

★「中国経済学入門」(名古屋大学出版会)

加藤弘之(かとう・ひろゆき)氏 神戸大学大学院経済学研究科教授



◇かみむら・やすひろ

1972年愛知県生まれ。95年東京大学文学部卒。2001年同大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。法政大准教授を経て現職。「若者問題と教育・雇用・社会保障——東アジアと周縁から考える」（樋口明彦・平塚真樹と共編、法政大学出版社）など。

「福祉のアジア 国際比較から政策構想へ」
上村泰裕氏（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

特別賞

◇選考委員（敬称略）

五百旗頭真 アジア調査会長・選考委員長

田中明彦 東京大学東洋文化研究所教授

白石隆 政策研究大学院大学学長

高原明生 東京大学大学院法学政治学研究科教授

小松浩 毎日新聞社主筆

主催 毎日新聞社、（社）アジア調査会

後援 外務省、文部科学省、経済産業省

特別協賛 スルガ銀行

協賛 日本生命、三菱商事

協力 全日本空輸（ANA）

◇福祉国家の特徴、浮き彫り

東アジアの多くの国々ではこれから急速に高齢化が進む。日本で高齢化率（総人口に占める65歳以上の高齢者人口の比率）が14%を超えたのは20年以上前、1994年のことである。しかし、これから、アジアの他の国々も急速に日本に追いついてくる。韓国、台湾、シンガポールでは高齢化率は2020年までに14%に達する。タイ、中国は20年代半ば、ベトナムも30年代半ばには高齢化率14%を超える。年金、医療、失業保険などの社会保障の整備・拡充は焦眉の政策課題である。

しかし、東アジアの多くの国々では、つい先ごろまで社会保障のカバレッジは低い水準にとどまっていた。また、近年、急速に拡充された国もあれば、なお低い水準にとどまる国もある。さらに、これから先を見渡せば、韓国、台湾、シンガポールはすでに先進国となっているが、タイ、中国、ベトナムなどは、1人当たり国民所得が先進国の水準に達するまでに、高齢化社会に入っていく可能性が大きい。

では、東アジアの福祉の現状はどうなっているのか。世界的に見て、東アジアの福祉にはどのような特徴があるのか。東アジアの国々の福祉システムの多様性をどう理解すればよいのか。東アジアの福祉を拡充するにはどのような政策的対応が求められるのか。

本書はこうしたきわめて重要な、また、優れて実践的な問題に正面から取り組んだ、知的構えの大きい好著である。ただし、対象とする問題が大きいだけに、内容的にはかなりむらがある。国際比較・地域比較の観点から東アジアの福祉を分析した章はすばらしい。そこでは、経済水準と不平等、高齢化と社会保障支出、年金、医療、失業保険などから見た福祉国家化の水準などの分析によって、東アジアにおける福祉国家の特徴と多様性が見事に浮き彫りにされている。一方、台湾の事例の分析は「深掘り」というには不十分で、もう一つ事例がある。しかし、それはこれからの課題である。本書の最大の強みは、東アジアの国々が直面する政策課題に正面から取り組み、その現状を国際比較によって明らかにしたことにある。【評・白石隆】

◇社会保障、国際的に論じて

アジアといえは、「経済のアジア」や「安全保障のアジア」を思い浮かべる方が多いのではないだろうか。欧州では「社会的ヨーロッパ」という概念が定着していますが、私は「福祉のアジア」を掲げることが今後の日本の東アジア政策の基本になるべきだと考えています。拙著はそうした主張を内包しつつ、東アジアの福祉の歴史と現在を国際比較の方法で描き出したものです。

1997年のアジア経済危機をきっかけとして、世界銀行などの国際機関が議論に加わ

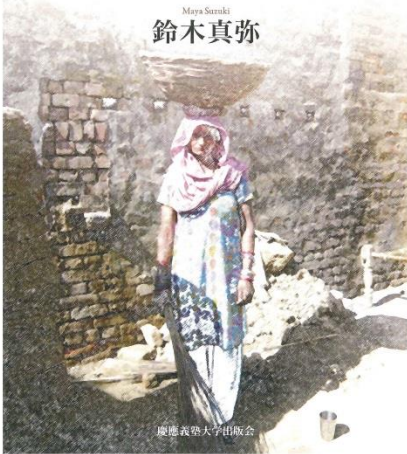


Viewing Caste from the Bottom in Contemporary Urban India

現代インドの カーストと不可触民

都市下層民のエスノグラフィー

Maru Suzuki
鈴木真弥



慶應義塾大学出版会

◇すずき・まや

1976年神奈川県生まれ。東京外国語大学外国語学部南西アジア課程卒。インド・ネーデル大学留学。慶應義塾大学大学院社会学研究科より博士号（社会学）取得。著書に「現代インド5 周縁からの声」（第1章「現代ダリト運動の射程」） 東京大学出版会、共著など。

特別賞

「現代インドのカーストと不可触民 都市下層民のエスノグラフィー」
鈴木真弥氏（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員／東京外国語大学特定研究員）

った結果、東アジア全体の福祉を議論する土台ができました。しかし、国際機関から出された処方箋は非常に画一的なものでした。そこで、国際比較研究に基づいて、各国の実情を踏まえた政策論を展開する必要があると考えたのです。

東アジアの中でも韓国や台湾では、80年代後半の民主化によって福祉拡充が始まりました。国内政治の状況やそれに応じた社会保障制度の整備状況は国によって違っていましたが、経済危機で地域全体の福祉の脆弱さがクローズアップされた。政治や経済の条件の違いを踏まえながら、地域全体として福祉の底上げを図ることが課題になったのです。

拙著には、各国の違いはなぜ生じたのかという分析の部分と、違いを踏まえたいえでどう底上げを図っていくべきかという主張の部分があります。

現在、東アジアの国際問題という経済連携や安全保障に注目が集まりがちで、せいぜい環境問題が議論される程度ですが、もっと失業や福祉について論じるべきです。各国の失業問題は、二酸化炭素や微小粒子状物質「PM2.5」と同じかそれ以上に、隣国や地域全体に影響を及ぼす可能性があるのですから。（談・上村泰裕氏）

◇清掃カースト、詳細に分析

現代インドのカーストほど外部の人間にとってわかりにくいものはない。民主主義が確立し憲法上人権が確保されていることになっているインドであるが、カーストは厳然として存在しているという。しかし、その実態となるとインドを数回訪問した程度ではなかなかわからない。

もちろん、これだけ重要な問題であるから、インド人のみならず世界中の研究者による研究蓄積は存在する。しかし、広義のカーストのなかでも最下層に属すると言われる「清掃カースト」についての本格的な研究は少ないようである。そもそもインド人研究者は比較的上位のカーストに属することが多く、清掃カースト研究のフィールド調査自身が忌避される場合が多いのだという。

その中で、本書は、不浄とされる仕事に従事する清掃カースト「パールミーキ」のコミュニティに飛び込み、長期にわたる参与観察をし、その結果を社会経済的な分析とカーストに関する思想と政策の歴史のなかに位置づけたきわめて包括的な研究である。全般的に言えば、カースト内婚率は高く清掃業従事者は多いし差別の現実も継続しているが、男性が清掃業から離れる傾向があることや、高学歴の弁護士や経営者もいることなどを本書は明らかにしている。

その意味で「自由」になりつつある人びとも増えている。このような人びとの子弟のなかには、かなりの年齢になるまで自らが「清掃カースト」に属していることを知らず、ある段階でその事実を知らざるを得ない状況に直面し葛藤に苦しむこともあるという。「身分かくし」でいくか「抵抗運動」をするかという、被差別民にある種普遍的に存在する難問が今でも続いている。

このような多くのエピソードに加え、ガンジーとアンベードカルのカーストに関する思想の対立なども適切に解説されており、社会経済的分析と相まって、本書は現代インドのカーストに関する良質の入門書ともなっている。【評・田中明彦】

◇少数者差別考える契機に

「自由・平等・民主主義」が憲法上保障された独立後のインドにおいて、カーストや不可触民差別というインド社会を特徴づけてきた問題はどのように変容しているのか、というテーマに挑戦したのが本書です。今回の受賞を契機にインドを知っていたら、マイノリティの問題を考えていただければ幸いです。

この本で焦点を当てている清掃カーストは、「インドの公衆衛生」をテーマに卒論を書いた時、その労働環境のすさまじさに衝撃を受け研究を始めました。インドでは下水処理が



◇ほった・えり

1971年東京生まれ。94年プリンストン大学歴史学部卒。2003年オックスフォード大学で博士号取得。同大、バード大学、政策研究大学院大学、イスラエル国立ヘブライ大学などで教職。著書に「PanlArianism and Japanese War 1931-1945 (Palgrave Macmillan, 2007)」など。

「1941 決意なき開戦 現代日本の起源」

堀田江理氏 (元オックスフォード大学リサーチ・フェロー)

特別賞

十分行き届いていなく、トイレの現場に携わっている人たちです。不可触民の中の一つのカースト集団で、インド亜大陸全体で社会的に蔑視されています。

インド憲法ではカーストそのものではなく、カーストによる差別を禁止しています。「宗教、人種、カースト、性別または出生地を理由とする差別の禁止」に関する条項があり、この中にカーストが出てきます。差別をなくするために努力はしているけれど、カースト的文化、カースト的慣習が残っているのが実情です。最近はデモなどではなく、差別を訴訟で解決しようという動きが出ています。

人々の声と行動から、カースト出自による生きづらさや葛藤を分析することを試みましたが、大都市デリーでの現地調査は、自分が女性ということもあり難しかったです。モザイク状に住んでいて「あなたほどのカーストですか」とは聞けない。治安が良くないので夜は出歩けない。幸運だったのは、私が日本人だったことです。日本に対しては戦後発展した国として印象が良いからです。

今後は、デリー以外の地域、農村部や国外に移住した不可触民の運動を明らかにしていきたいと考えています。(談・鈴木真弥氏)

◇戦争選んだ人間劇を活写

本書はまれに見るストーリーテリングの書である。読者は魅力的な叙述に引き込まれ、ノンフィクション小説を読むような面白さで、対米戦争にはまる日本を追体験できよう。

酔っ払った路上の壮漢が思わず手を出すのとは異なり、日本政府は公的な会議で数限りなく討議を重ね、しかも米国の軍需生産力が日本の20倍以上あり、最終的に勝てないことをほぼ認識しながら開戦を決定した。緒戦の一撃はともかく、大局的展望の立たない中で確信を欠いたまま、なぜ重大決定に至ったのか。

天皇に対米戦争反対の意向があり、東郷茂徳外相や賀屋興宣蔵相の合理的な反論もあった。だが国内には対外屈従と妥協を悪とし、戦争を美とする気分が1930年代に積み上げられていた。中国からの撤兵を峻拒する陸軍の組織意志が中堅幕僚に体现され、ふらつきやすい軍幹部を掣肘した。政治の頂点に立ちながら、決定的瞬間に頑張ることができず沈黙して機会を失う近衛文麿、逆に無為懦弱と不決断を嫌い、大局を失う政府内決定をえてする東条英機らの心事が描き出される。

著者はそれらを肯定するのではなく、最終的に勝てない側の日本が戦争回避に全力を注がねばならなかったとの立場を堅持する。

手堅い学術的な政策決定論や日米交渉史に立ち向かう以上に、丸山真男による超国家主義の精神構造批判や、「失敗の本質」グループによる日本組織の病理分析を継ぎながら、それを生身の人間によるシエークスピア劇として表現しようとしたのが本書ではなからうか。

市井のクリティークである永井荷風の日記、中国大陸を転戦する兵士Uの想(おも)い、国際的文脈から日本の針路を見据えるスパイ・ゾルゲと協力者尾崎秀実らの認識などを後景に示しつつ、破局に向かう時代の日本人の心の情景と精神のありようを描き出すまれな作品である。【評・五百旗頭真】

◇長年の「なぜ」に答えた

本書は元々、アメリカの一般読者に向けて「日本側から見た真珠湾」という切り口で書いたものです。先達の優れた研究が数多くある分野を扱っているだけに、日本での出版に意義があるのか迷った時期もありました。それが今回、日本国内でも評価されたことに勇気づけられました。

学生時代から続く自分自身の興味の終着点であり、出発点とも言える作品です。なぜ日本はむちゃな戦争をしたのだろうか、そしてその「なぜ」を、どのようにしたらわかりやすく説明できるのだろうかという問題は、高校生のころから頭の中に取りました。時間はかかりましたが、自分なりの精いっぱいの答えが形にでき、ほっとしています。



Hiroyuki Kato
加藤弘之 著

中国経済学入門

「曖昧な制度」はいかに機能しているか

「論」から「学」へ――。成熟した中国経済研究からエッセンスをつまみ出し、所有・市場からガバナンスやイノベーション、対外援助、さらには腐敗・格差まで、生動する独自の経済システムを、長期的なパースペクティブのなかでトータルに説き明かした待望の書。

定価(本邦4,500円+税) 名古屋大学出版会

◇かとう・ひろゆき

1955年愛知県生まれ。大阪外国語大学卒業。神戸大学大学院経済学研究科後期課程退学。同大助教授などを経て教授。今年8月30日に逝去。主な著書に『曖昧な制度』としての中国型資本主義(NTT出版)など。

特別賞

「中国経済学入門」

加藤弘之氏(神戸大学大学院経済学研究科教授)

「日米開戦は軍部の独走によってもたらされた」「日本はぎりぎりまで追い込まれ、戦争はやむをえない究極の選択だった」という認識が、一般的に日本の社会に共存しているのが現状だと思えます。しかし、そういう解釈は「一億総さんげ」ならぬ「一億総無罪」という考えに値する危険なものだと思います。

作戦を綿密に練り、秘密裏に艦隊を移動させ自ら開戦行動をとるといふ決断は、国家自身の積極的な開戦の選択で、敵国によってなされたものではありません。この本で強調したかったのは、日本が始めた戦争はほぼ勝ち目のないものであり、それを指導者たちもおおむね正しく認識していたこと、開戦決意は熟考された軍部の侵略的構想に沿って描かれた直線道路ではなかった、ということでした。そうとは意識せず、日本はいくつかの対米外交緊張緩和の機会を逃し、外交的選択肢を狭めていきました。その成れの果ての対米開戦決意は、「方が一の勝利」を期待するばかり打ち的妄想によって正当化されました。(談・堀田江理氏)

◇曖昧な制度、功罪を解説

現代中国をいかに理解し、説明するか。旧ソ連、東欧と異なり、市場化を進めてきた中国が35年の長きを超えて高度成長を維持し続けることができるのはなぜか。研究者を悩ませる難問である。近年では、中国に関する情報やデータが増大したこともあり、計量経済学などの新しい手法を使う分析も増えてきた。しかし著者は、「中国的なるもの」に徹底してこだわる。優れた経済パフォーマンスの原因を、長い歴史的伝統を継承しつつ、建国から30年にわたった集権的社会主義を乗り越えて形成してきた独自の経済システムの優位性に求める。

例えば、伝統的な制度である「包」。これは請負の総称で、「指定した内容の完成を担保するならば、あとはあなたの自由にしてよい」ことを意味する。農家と村の間の、あるいは上級政府と下級政府の間の請負は、文革後の中国経済の活性化に大きく貢献した。その他にも、農村の土地の集団所有を基礎とした土地株式合作社や、競争力を有する混合所有制、技術やデザインの模倣を前提としたイノベーションの仕組みなどを著者は取り上げ、こうした「曖昧な制度」が変化を起こしつつも頑強に生き残り、機能していることを示す。また腐敗や格差といった、「曖昧な制度」が引き起こした問題点も検討の対象としている。

中国に特徴的な諸々の制度を「曖昧さ」という言葉で括ることに異論もありえよう。だが、具体的な制度についての著者の解説は堅実な実証研究に支えられ、興味深い。著者が目指したのは、中国の経験という実践の検証によって、経済学の新たな理論的發展に貢献することだった。この志に大いに共感する地域研究者は評者だけではないだろう。著者、畏友加藤弘之は、60歳の若さで本年8月に死去した。本書の末尾に記された若き中国研究者へのメッセージが、胸に沁みる。【評・高原明生】